

東日本大震災  
復興支援  
活動報告



THE ROTARY CLUB OF TOKYO EBISU

東京恵比寿ロータリークラブ

国際ロータリー第2750地区

この報告書は2011年3月11日に起った東日本大震災に対して東京恵比寿ロータリークラブは何を考え、何を実行したかの記録です。



当クラブは3月の大震災発生以降、平成24年7月までの16ヶ月の間に会員個人が行った復興支援活動を除いてクラブとして11個のプロジェクトを行いました。これらは当クラブの会員からの提案を元に、当クラブの災害復興支援委員会で検討・企画されたものが殆どでございます。

当初ポリオ撲滅のために企画されておりましたチャリティコンサートは災害復興支援目的にも募金目的を加えて実行されました。また、海外のクラブからの支援要請によるプロジェクトもございます。プロジェクトを実行するにあたり以下のロータリークラブのご協力を得る事ができました。

台北永福RC、台北福友RC、東京西RC、東京渋谷RC、ニューヨークのイースト・ヨンカーズRC、  
アラスカのホーマー・ダウントンRC、宮城県の亘理RC、奈良大宮RC、福島県の南相馬RC

プロジェクト費用の半分ほどは恵比寿RCの災害積立金の取り崩し、会員からの寄付で負担致しましたが、ご協力頂いたクラブからも多額の資金を頂き、ロータリー財団からもマッチング・グラントを、災害復興支援日本委員会からは補助金を、そしてガバナー会から地区に戻された地区災害復興支援補助金も活用させて頂きました。

ここにご協力頂きました多くの関係者に心から感謝し、御礼申し上げます。

## I 東日本大震災発生直後から災害復興支援委員会設置までの経緯

クラブ創立15周年の記念行事もつつがなく終わり、いつも通り淡々と例会が行われていました。そんな中、災害支援に関しては、2月22日に多くの日本人留学生が犠牲になられたニュージーランド大地震へのお見舞金の議論が行われて、30万円を送る事が3月7日の東京恵比寿ロータリークラブの理事会で決定しました。震災直前の事です。

当クラブでは世界で起る大災害に対応するため、年度予算とは別枠で500万円を災害復興やお見舞金の支払いのため積み立てています。そこからこのお見舞金は拠出されたのです。

この決定から4日後の2011年3月11日、今度は海外ではなく日本で、東日本大震災が起きたのです。まさかの事でした。東京でも鉄道は止まり、多くの帰宅困難者が出来ました。

震災後の例会は3月15日です。大災害に直面した我々はうろたえました。例会を開くべきか、休会とすべきか意見も分かれました。しかし、予定を変更せずに例会を開き、卓話も予定通り替えない事と致しました。まずやるべき事は会員、会員のご家族の安否確認、会員の会社の被害状況の把握が第1と考えただけではなく、直接的な被害に遭わなかつた我々は「平常心」を保ちこの大災害に遭遇しても「今まで通り」を意識すべきではないかと考えたからです。

### 3月15日例会

最初に亡くなられた方々に対して黙祷を捧げて開始され、幸いにも会員、会員のご家族・親戚の安否が確認された事がまず報告されました。しかし会員の会社では大きく被災された工場などが4カ所あった事も報告されました。卓話は予定通りそのまま行われましたが、その後全員(当日の出席率49.4%)が残り、「今、ロータリアンとして何をなすべきか」また「何が可能か」についてテーブル毎に議論を行い、その後予定されている観桜会、台北の姉妹クラブ祝賀会への参加、国際大会へのブース出展、職場見学などの企画が再検討され、一部は中止されました。また、この会合で多くの会員から義援物資の申し出と寄付金の募集の提案があったため、全会員に対して、どんなものを提供出来るかのアンケートと義援金の募集が実施されました。

3月11日以降、ニューヨーク、カナダ、オーストリア等のロータリアンから当クラブ会員に対して支援したいとの連絡があり一部は実施されました。また姉妹クラブの台北永福ロータリーからは10,000米ドルの寄付、台北福友ロータリーからも5,000米ドルの寄付が届けられました。

### 3月25日例会

予定通り実施されましたが、前例会でのテーブル毎の議論を踏まえ、短期(3月末まで)中期(9月末まで)長期(10月以降数年間)に分けてロータリアン個人として今、意識すべき事柄として、次の提案が行われました。

## 3.11

ロータリーのモットー「超我の奉仕」 R財団「世界で良いことをしよう」

中核をなす価値観 「高潔性」を踏まえて行動すべきであり、

- ・今は助ける時、ドサクサにまぎれて儲けようとする時ではない
- ・噂に惑わされない メディアを信じ口コミやインターネットから来るデマを信じない
- ・食品の安全性については国の発表を信じる

### 短期的(3月末まで)

すべき事

- ・被災者の気持ちを共有しよう(少しは体験した、帰宅難民の体験)
- ・現地の状況を正確に理解する 元気づける
- ・お金を寄付する まだ物は送らない
- ・我々も「日本を復興させる」と言う強い意志を持つ

間接的支援

- ・関係ない人は現地に行かない ・買いだめをしない
- ・節電(一家に一灯、暖房を止める、コタツを使う、コンセントを抜くなど)
- ・歩く、自転車に乗る、車を使わない ・会合や旅行を控える
- ・無駄な電話を止めメールやFAXを使う ・被災地の親類、知人を引き取る
- ・美容院や理髪へ行くのを少し控える ・東京へ避難してきた人々を助ける

### 中期的(4月—9月末まで)

すべき事

- ・支援物資を被災地に送る ・ボランティアとして現地へ行く
- ・さらにお金や物を寄付をする ・被災地近くへ旅行で泊まる
- ・チャリティやイベントなど募金活動をする ・被災地の物を買う

間接的支援

- ・省エネする(蛍光灯、LED、省エネエアコン・冷蔵庫・テレビ等に替える)

### 長期的(10月以降 7—10年間)

すべき事

- ・個人消費を増やす ・孤児や遺児への奨学金制度を作る
- ・太陽光発電、太陽熱温水器、水素発電などを導入する ・家を断熱化する
- ・ハイブリッド車、電気自動車に買い換える
- ・被災地での心のケアを支援する

### 3月29日例会

観桜会は中止し、夜間例会に変更して実施しました。卓話はなく、テーブル毎に理事1名が入り災害復興支援について議論致しました。その中で救援物資アンケートの結果が報告されました。会員からは多くの物品の寄付が提案されましたが、山東昭子会員(参議院副議長当時)から今この時点では現地が混乱するから、物は送らないで欲しい、国に対応を任せほしい、もし送るなら自分で現地まで運んで知り合いに直接手渡して欲しいむね連絡がありました。したがって我々が足を確保出来るまで、物品は各人がキープすることと致しました。

### 4月5日例会

例会前に理事会が開かれ、各理事から29日の会議でどんな意見が出たかの報告がなされ、今後の参考にする事となりました。

地区から提案の有った義援金としては250万円(災害積立金から200万円、中止した企画予算から50万円)を地区

経由でガバナー会へ提出する事が決定しました。

また今後の素早い対応を考え、クラブ内に災害復興支援委員会を設立し、都度理事会で承認を受けながら活動を決めるのではなく、この委員会で基金の範囲内で復興支援活動を実施し、理事会には後で報告するという事が承認されました。委員長は長島会長ノミニーが選出され、メンバーには石井会長、伊藤会長エレクト、被災地とのパイプ役として吉川会員、織田会員、海外とのパイプ役として榎原会員、地区とのパイプ役として、森尾会員、神山会員が選出されました。

同時に行われていた会員からの災害復興支援寄付金は315万円に達し、これをもとに災害復興支援委員会で復興支援活動を実施する事となりました。

寄付金については色々な意見が出されました、「日本の寄付文化とロータリー」というタイトルの卓話が榎原会員から行われ、世界の寄付文化と日本との違いを中心に講演されました。

## II 2011年4月から2011年6月末までの復興支援活動

### Project1 救援物資の被災地への提供

3月に会員から寄せられた救援物資は4月中旬から被災地へ直接送るルートが確立出来ました。織田会員の友人で横須賀在住の野澤氏(元横須賀東ロータリークラブ・パスト会長のご子息)は震災直後から宮城県石巻市の牡鹿半島地区に「その当時一番必要性の高かった食料品」を中心に毎週横須賀から夜、車を運転しボランティアで現地に赴いておられました。

野澤氏が支援活動を始めたのは、震災直後に仙台市太白区の重度障害者・難病ホスピス「ありのまま舎」の入居者70人が孤立しているとの情報を入手し、水・食糧、呼吸器維持の機材を動かすための燃料の提供を全国に呼びかけたのが始まりです。その声は織田会員を通じて当クラブ会員にも伝わり、水や燃料の携行缶などが「ありのまま舎」へと届けられました。

さらに現地にて石巻市の惨状を耳にした野澤氏は、陸部の全てが破壊された牡鹿半島で孤立している住民への支援を開始。それに我々恵比寿の会員から提供された物資を同時に運んで頂ける事になったのです。野澤氏は現地の石巻市社会福祉協議会と常に連絡し、市が物資を届けにくい避難先へ、被災者の要望に合わせた物資を振り分け梱包して運んでおられたのです。したがって我々の救援物資は直接被災者に届けることが出来ました。

26名(事務局員を含む)の会員からは現金(ガソリン代・高速代として)、米・麺類・飲料水・果実・菓子・保存食などの食料品、衣類・生活雑貨・衛生用品・家電などの生活用品が集まり、大量であったので5月末までに3回に分けて現地へ届けられました。



### Project2 救援物資運搬用のボランティア車両を寄贈

横須賀の野澤氏の車が使用不能になり、現地までの足が無くなりました。そこで東京恵比寿ロータリークラブで中古車を購入する事に致しました。名義は野澤氏でしたが、救援物資を運ばなくなったら被災地で車を失った被災者に無料で譲るという条件での事です。

野澤氏は協力者数名と震災直後から週2回現地へ行き石巻の牡鹿半島、気仙沼などで、公共広域避難所ではなく個人の住宅等に避難して居られる被災者に対して、現地の要望を聞き我々を含む支援者に連絡して、被災者に直に届ける活動を非常に精力的にまた強力に推し進められた方です。地元の社会福祉協議会や支部長等とは緊密な連絡を取り合い、行政が支援しにくい地区に直接支援しました。恵比寿ロータリーの被災地での活動はこの野澤氏の活動なくしては実行出来なかっただろう。野澤氏のご努力に心から深く感謝致します。

当クラブの吉川会員と織田会員は個人的にも「炊きだし」を行い、吉川会員は1年以上にわたり24回も実施しています。



野澤氏からの要請を受け、5月21日に当クラブの会員有志も参加して牡鹿半島の荻浜中学校で行った炊き出しでは、焼きそば150人分、沼津産の干物やソーセージ300個、パン100人分、飲み物100人分等を用意し、水や炭、炊き出し用器具も全て持参いたしました。本来は漁業が盛んな地域であったのに「震災後に魚を食べるの初めて」と、我々が不慣れな手つきで焼いた干物を何度もお代わりしていただけたのは印象的でした。

野澤氏の情報で石巻市の社会福祉協議会で車椅子、介護用ベットが流されたため、その提供の要請もありました。そこで我々は全国の縁者に呼びかけ提供を募りましたが残念ながら、車椅子は2台、ベットは1台のみでした。しかし、この件は源流の会に呼びかけた事により、全国の様々なロータリークラブから問い合わせがありました。石巻市社会福祉協議会に直接連絡をお願いしてやり取りを進めていただきました。



### Project3 亘理町へ幼稚園バスを寄贈するマッチング・グラントに寄与

2011年5月のニューオーリーンズでのロータリー国際大会に海沼美智子会員が出席した際、田中作次R I会長エレクト(当時)より、アラスカD5010のガバナー、ジェーン・リトルさんを紹介されました。ジェーンさんから、東日本大震災の被害を受けた方々のために何かして差し上げたいとお申し出をいただき、田中氏から協力を頼まれました。

国際大会にブースを出していた仙台青葉RCの大江勝雄さんから被災状況をお聞きし、宮城県亘理町のふじ幼稚園でマイクロバスを2台必要としていることを知りました。ふじ幼稚園では、園舎は津波で被災し、マイクロバスは園児8名と教師1名を乗せたまま流され、全員が亡くなっています。

ジェーンさんのホーマー・ダウントンRCと亘理RCとで、マッチング・グラントを申請することになりました。ホーマー・ダウントンRCが30,000ドルを出し、プライマリークラブとなり、亘理RCも100ドルを出しました。我が東京恵比寿RCは3,000ドルを寄付し、D6840も3,565ドルを寄付しました。加えて、D5010から9,300ドルの寄付がありました。マッチング・グラントの結果として、マイクロバス2台分、85,730ドルをいただくことができました。



12月1日の贈呈式には、関係したロータリークラブの代表として、亘理RCの会員たちから2台のマイクロバスが贈呈されました。大型(園児39人乗り)・小型(園児18人乗り)の幼稚園バスです。ふじ幼稚園仮園舎での贈呈式の模様は、地元の新聞、河北新報読売新聞などに写真入りで大きく掲載されました。



## Project4 石巻市社会福祉協議会に電動自転車26台を寄贈

ゴールデンウィークが終った頃、野沢氏経由で石巻市社会福祉協議会に問い合わせ、「何が今必要なのか」をお訪ねしたところ、現地に居られる26人の民生委員の方々に電動自転車があれば有り難いと返答をいただきました。ガソリンはなかなか手に入らなくても電気は来ている。被災者の状況把握に走るための電動自転車が欲しいとのことでした。

牡鹿半島では車が津波で流され、民生委員は避難所以外に点在している被災者を訪問することが極めて困難になっていました。尾根筋を走る道はアップダウンが激しく、普通の自転車では被災者にちょっとした物さえ届けることも出来ない状況だったのです。

できれば被災地の店舗で購入して被災者へ届けるW支援として、現地の自転車屋で26台を購入したいと考えましたが、電動自転車は現地でのニーズが高く、思うように手に入れません。そこで直にメーカーに問い合わせたところ在庫は無く、納品に数週間必要とのことでした。幸いにも当クラブ会員にメーカーの関係者がいたためそのルートでようやく26台入手し、6月30日に石井会長、河合幹事、長島委員長を中心に災害復興委員会メンバー合計6名で現地に赴き社会福祉協議会で常務理事と民生委員の代表に贈呈致しました。その際常務理事からは石巻市の災害状況を詳しくご説明頂きました。

費用は多額に及びましたので、既にご寄付頂いている台北の2クラブからの支援金に併せ、親クラブの東京西RC、子クラブの東京渋谷にお願いしようやく26台を揃えることができました。

ご寄付頂いたクラブは次の通りです。

台北永福ロータリークラブ 8台	台北福友ロータリークラブ 4台
東京西ロータリークラブ 4台	東京渋谷ロータリークラブ 2台
当クラブ 8台	

合計26台の電動自転車にはご寄付頂いたクラブ名のネームプレートがそれぞれ付けられました。



### III 2011年7月以降の復興支援活動

#### Project5 牡鹿半島小渕浜の仮設住宅にコタツと布団110セットを寄贈

2011年9月27日に開催された災害復興支援委員会において、次なる支援の検討をすすめた結果、仮設住宅における防寒対策が不十分で、厳しい冬を迎えるにあたり暖房器具等のニーズがある事をメディア等の情報によりわかりました。そこで、当クラブとしてどのくらいの仮設住宅に対し必要か調べなければならず、電動自転車を寄贈した石巻市社会福祉協議会に確認をいたしました。しかしながら、石巻市の社協では具体的なニーズを把握しておらず、以前炊き出し支援をした牡鹿半島地区を再度紹介され直接確認をしたところ、現地では是非必要との事でした。すでに冬の訪れが近づいており、一刻も早く手配をする必要がありました。

コタツは被災地である多賀城市の電器店から購入し、恵比寿ロータリークラブのシール張りと配送は地元業者に委託いたしました。

2011年10月28日、宮城県石巻市小渕浜地区の仮設住宅に110セットのコタツとコタツ布団を届けました。委員会メンバー4名が訪問し受け渡し場所となった「民宿めぐろ」において、2カ所の仮設住宅の自治区長に贈呈。その後それぞれの仮設住宅に運び各家庭に1台ずつ配布いたしました。何戸かの住宅を訪問し、あがらせていただくとやはり隙間風があり、充分な防寒対策が出来ていない事がよくわかりました。訪問した住宅で、皆様が喜んで下さったことで、このプロジェクトが意義あるものだったと認識できました。



## Project6 奈良大宮RC東大寺・石巻慰靈祭プロジェクトを応援

友好クラブである奈良大宮ロータリークラブによる東大寺・石巻慰靈祭が2012年2月5日に石巻大街道斎場「清月記」にて行われ、事業を応援した当クラブからも災害復興支援委員会メンバーと有志の計10名が参加致しました。

3.11の大津波で多くの児童・教職員を失った石巻市立大川小学校の遺族会のために、奈良大宮RCの会員でもある北河原公敬氏(華厳宗管長、東大寺別当)と4名の僧侶が石巻に出向され、午前10時より慰靈・復興祈願法要が始まりました。

厳かな祈祷に続き、北河原管長より「誰も一人じゃない。皆と一緒に」との法話があり、その後、管長を囲んで遺族会員との懇談の場が設けられ、全員に「絆 御守」が手渡されました。

昼食会場では遺族会の方々に奈良大宮RCによる奈良の特産物(笛寿司や大和鶏つみれ汁など)の炊き出しと茶菓が、当クラブから苺が振る舞われました。この苺は、私たちが石巻の支援を進めてきた際にご尽力いただいた横須賀市の野沢氏が、寒波襲来の中で全国の苺農家にあたって徳島から300パックを取り寄せて下さったものです。

慰靈祭終了後、当クラブ参加者は車3台に分乗して牡鹿半島まで行き、昨年10月にコタツを寄贈した仮設住宅110世帯の方々に奈良の銘菓や苺をお届けし、仙台から帰京致しました。



## Project7 医療支援「きぼうときずなプロジェクト」に協賛

このプロジェクトは震災直後の平成23年4月より現在に至るまで福島県の相馬市、いわき市、郡山地区の避難所、仮設・借り上げ住宅を保健師・看護師が訪問し、医療支援・訪問介護・生活指導を行っているプロジェクトです。これは聖路加看護大学(日野原重明理事長)の協力を得て行われております。この活動は多くの支援者からの寄付により行われており、今回東京恵比寿ロータリークラブはこの活動に共鳴しこの支援活動に寄付を致しました。

活動の中心は石井苗子氏(看護師)が行っており、のべ1,200人の看護師・介護師が現地を訪問致しました。このプロジェクトにより被災地に充実した訪問介護が実現し、放射線リスクの情報提供、心のケア、仮設住民の健康改善、地域医療の再構築の手助けが実現致しました。

## Project8 日野皓正 東日本大震災復興支援・ポリオ撲滅(END POLIO NOW)チャリティーコンサートを開催

2012年2月28日、東日本大震災復興支援とポリオ撲滅の願いを込めて、日野皓正カルテットによるチャリティーコンサートを開催いたしました。

日本を代表する世界的ジャズトランペッターの日野皓正さんは、3.11以降、被災地で吹奏楽部員の子どもたちと共にライブを行うなど、大震災復興支援活動には殊の外、力を入れられ、また小児がんや白血病で苦しんでいる子どもたちのための支援活動実行委員もなさっているロータリアンです。

私達の想いを込めたコンサートを是非、日野さんにお引き受けいただきたいとお願いしたところ、快くご賛同いただき、開催の運びとなりました。

満席の会場は、外の寒さを忘れるほどの熱気に包まれ、エネルギーで、また優しく、全体の調和を取りながら展開されていく曲の数々に、心の底まで酔いしれました。

2011-12年度のクラブテーマは、"和をもってつなごうロータリーの輪"ですが、本当に大きな和(輪)が繋がれた素晴らしいコンサートでした。

純益金の半分は、地区のロータリー財団ポリオプラス委員会に贈呈させていただきました。「ポリオのない世界」というロータリーの夢を実現するため、ささやかですが、ご協力できる事を誇りに思っております。

一方の半分の純益金は、東日本大震災復興支援プロジェクト地区支援金と当クラブの震災復興支援金の一部を加え、福島県立小高工業高等学校の4月よりスタートする仮設校舎の教材と備品購入資金に充当させていただきました。3月28日の贈呈式当日は、相双分区ガバナー補佐・南相馬ロータリークラブの酒井善盛様はじめ5名がお迎え下さり、2大地元紙の福島民友新聞社、福島民報社の支社長も取材に来てくださいました。

日野皓正氏と浅からぬご縁のある南相馬ロータリークラブとの絆を深め、少しでも被災地の未来を担う子供たちの力になれることを嬉しく感じております。



クラブの会員が一丸となって取り組み、また、周りの方々の温かいご協力をいただき、大成功を収めたコンサートでした。



## Project9 「ファイト新聞」ユネスコ表彰の渡航費・滞在費を寄贈

2012年4月2日、パリのユネスコ本部で行われる表彰式に児童が参加するための渡航費・滞在費を補助致しました。

東日本大震災で気仙沼小学校体育館に家族と共に避難していた子どもたちが、震災直後の3月15日から手書きの「ファイト新聞」を壁に貼りだし、7月3日の第50号に到るまで大人たちを毎日励まし続けました。この新聞は色あせ破れていましたが、カメラマンの松田典子さんとセイコーホームズ(長野)の努力によりデジタル化され、色や破れも修復されました。

「ファイト新聞」の復刻版の完成(2011年11月24日)は多くの新聞で報道されました。復刻版は3部作られ1部はユネスコに送られましたが、ユネスコでは子どもたちのこの活動を「ジュニアジャーナリスト」として顕彰し、「ファイト新聞」をパリのユネスコ本部に展示するイベントが企画されました。ユネスコからはその際子どもたちにもぜひ参加して欲しいと要請されましたが、彼らの親は被災しており費用を捻出できなかったのです。

そこで当クラブは地区へ補助金を申請し、「ファイト新聞」スターディングメンバー5人(小学生2人=編集長、中学生2人、幼稚園児1人)と子どもたちの保護者3家族から1名ずつ3名、合計8名のパリまでの航空券代と宿泊費を負担する事を計画致しました。これは共同通信社からの提案で、子どもたちの行動はいわばジャーナリズムの原点を示した活動であり、ユネスコでも賞賛に値すると認識した訳でございます。

この「ファイト新聞」は避難所の大人たちを勇気づけたのみならず、この活動が「記者魂」の根源を示したものとして、ユネスコで認められ、「多くの被災者や関係者に大きな希望と励ましを与えた」と称賛され、パリではTVで放映され、現地の新聞にも載りました。日本のTVではNHK、テレビ東京のニュース、新聞では読売、ジャパンタイムス、多くの地方紙で取り上げられ大きな反響がありました。多くの新聞でパリまでの渡航費用がロータリーにより負担されたことが書かれており、ロータリーの広報活動としても有意義でした。

この活動は学校現場で教材として取り上げられるなど、子ども新聞作りの機運を盛り上げることにも大いに貢献致しました。



信 憲 春 三 樂 扇 月 間

2012年(平成24年)4月27日 金曜日

### 気仙沼で手作り 「ファイト新聞」 支 援 東京のロータリークラブ

国連教育科学文化組織(ユネスコ)が、東日本大震災の避難所の壁新聞「ファイト新聞」を手作りした宮城県気仙沼市の子どもたちを慰藉したのを受け、文部省の司馬さんから贈呈する東京ロータリークラブが同新聞の活動支援を決定。司馬さんによる支



新聞の子どもたち 東京都内にて  
司馬さんとおなじみのロータリーキッズ

贈呈の贈呈式が東京都内で行  
われた。 司馬さんが「被災した人たち

子どもたちを称賛。パリのユネスコ本部での顕彰に臨んだ初代編集長の小学3年西田理沙さんと第2代編集長の小学5年小山里子さんらが「ジュニアジャーナリスト」としてたえられた経緯を説明し「これからも復興のことを新聞にしていきます。応援、ありがとうございます」と話した。 支援金は由田さんらの渡航費などに充てられる。ファイト新聞は今後、フランスを含め新聞による国際交流にも力を入れたいとしている。



## Project10 牡鹿半島小渕浜にて心の復興支援「住民ふれあい昼食会」を開催

2012年5月27日、宮城県石巻市牡鹿半島小渕浜地区で住民同士の懇親的な触れ合いを切望して、「住民ふれあい・おにぎり昼食会」を開催致しました。小渕浜地区の住宅のほとんどは無残な勢いで津波に流されてしましましたが、小高い場所に住まわれていた20世帯だけは辛うじて流出を免れました。その20世帯の主婦の方々にお声を掛け、早朝よりお料理のお手伝いをして頂くなど、仮設住宅に暮らす110世帯の方々と共に食事と懇談をしながら、互いにこころのケアをすること目的とした会でした。

プロジェクトの発信基軸は地域の要となっている「民宿めぐろ」にお願いしました。海側に建ちながら大津波に耐えた建物では100名前後の住民を受け入れ、仮設住宅が建つまで避難所となっていましたが、数か月間物資も届かず、様子を見に来てくれる人もなく、不安のなかで肩を寄せ合い生活した唯一雨風をしのげた場所です。

皆さん一様に失った家屋は戻ることもなく、特に牡鹿半島は雇用の道も多くありません。現在も復興はまだまだ遅れている状況で、瓦礫の山は点在しています。しかし住宅の土台等はボランティアの方々の協力もあり、すっかり片付けられて、割れた道路に畳が敷かれていた状態ではなくなりました。

避難所となっていた「民宿めぐろ」に帰って来た、と言う形の「おにぎり昼食会」でしたが、ほぼ1家庭から主婦が1~2人参加して、先ずはおにぎりを540個作ることから開始し、中身のたらこと鮭を焼き続け、ビッグサイズの唐揚げ2000個やあんかけ汁など、皆さんとても笑顔で調理しました。開場を待ちかねて大広間に集まってきた方々が召し上がっていける間に、家で待っているご家族のためのお土産作りも大奮闘。恵比寿ロータリークラブより参加した11名は配膳のお手伝いをしながら住民の皆さんのお話に耳を傾け、家族のように食卓を囲むあたたかい時間を持てたことにたいへん感謝しております。



## Project11 倉本聰氏企画の演劇「明日、悲別で」の東北被災地公演に協賛

被災地の心の復興支援を祈念して、倉本聰氏が企画した福島、宮城、岩手3県での無料公演・14ステージに東京恵比寿ロータリークラブが協賛しました。

北海道のかつての炭鉱町・悲別を舞台にした内容は、日本のエネルギー政策が石炭から石油へ、そして原子力へと大きく転換すると共に人々の生活は変わり、そのたびに失ったものも得たものも沢山ある。原発の恩恵も沢山受けた。しかし災害の起きた今こそ原点にかえり、本来人間が生まれながらに持つ心のエネルギー資源「希望」を再起すべきではという問いかげを元に創り上げた作品です。客席には涙する方々も大勢いらして、感動したと言う感想が沢山寄せられました。

震災後、行方不明の会員もおられる大変な環境の中で復興に力を注いでいる南相馬RCと当クラブが手を繋ぎ、7月21日の南相馬市民文化会館での公演には共にボランティアとして参加しました。

東北各地の劇場は地元の方々がふれ合う場所にもなり、皆さん的心がひとつになったスタンディング・オベーションが起った公演です。当クラブがこの公演に協賛できましたことを皆様に厚く御礼申し上げます。



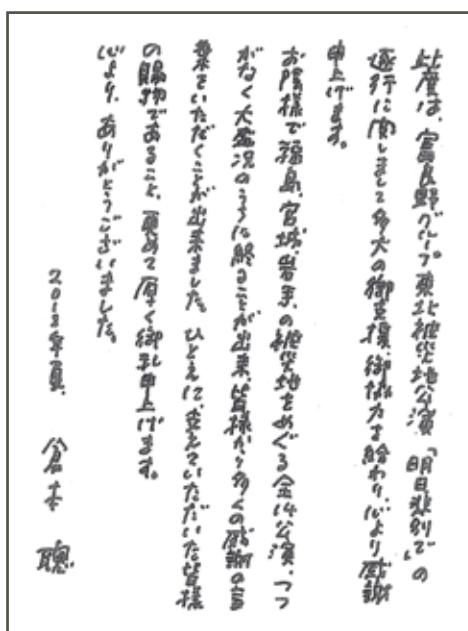
国際ロータリー第2750地区  
東京恵比寿ロータリークラブ

ロータリークラブとは職業倫理を重んじる実業人や専門職業人の集まりで、1905年創設、全世界で120万人、日本では9万人の会員が地域や海外における貢献活動に励んでいます。活動を行うときはそれが属する地域のクラブを通して行ない、日本にはこうしたクラブが約2300ある中、東日本大震災の被災地復興に向けて私たち恵比寿ロータリークラブも多岐にわたる支援活動を続けております。

今回は富良野GROUP公演2012夏「明日、悲別で」の応援にご縁を戴いたことで、人間が本来持っている「希望」のエネルギーが皆さまの心に灯りをともし、地域や世代を超えた絆が深く繋がっていくことを願って止みません。

被災された方々にはロータリーの仲間たちもいます。未だ行方が分からぬ方、難は逃れても互いに連絡が取れない方々がこれを機に再会し、心を共にできることを祈念しております。

東京恵比寿 RC 〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿4-20-2-912 TEL: 03-5420-6801



東京恵比寿ロータリークラブ

〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿4-20-2-912 TEL 03-5420-6801 FAX 03-5420-6802  
URL <http://www.tokyo-ebisu-rotary.gr.jp> EMAIL [office@tokyo-ebisu-rotary.gr.jp](mailto:office@tokyo-ebisu-rotary.gr.jp)